

指導すべき語彙の増加に対応するには？

司会者 吉田 三郎（敦賀市立看護大学）

提案者 吉水 慶太（三重大学教育学部附属中学校）

三仙 真也（福井県立藤島高等学校）

長谷川佑介（上越教育大学）

1. 設置趣旨

昨年、本年と中学校、高等学校において新学習指導要領が施行され、新しく発行された教科書の語彙の増加に対して、学校現場では対応に苦慮する声も聞かれる中で、コミュニケーション活動、表現活動の活発化の機会と捉えて特に発表語彙の育成を目指した実践例をもとに提案を行い、また外国語語彙習得の観点からの論理的な解説を試みるものである。

2. 提案要旨

(1) 「指導すべき語彙の増加への対応—生徒の表現力を育成する中学の実践—」

吉水 慶太

中学校で学ぶ単語数が増え、1,600～1,800語程度となった。指導すべき語彙の増加に困惑するのではなく、使える語彙が増えることで生徒の自己表現の幅が広がるというポジティブな面に着目し、英語をただ勉強する（インプット）のではなく「英語を使う（アウトプット）」ことを意識した授業づくりと、1人1台タブレット端末の活用による学習を通して、生徒が語彙を含む英語力を身につけていく実践を紹介する。

(2) 「英語ディベートを効果的に用いた語彙指導」

三仙 真也

高校の学習における語彙指導で重要なのは、背景知識の理解だけでなく、使用したい言語により多くの文脈や使用する場面を繰り返し与え、自己関与度を高めることである。勤務校では「広く教養を得る活動」をベースに、4技能5領域と思考力を伸ばすためにディベートをはじめ様々な言語活動の導入により、生後の語彙力や表現力・思考力を飛躍的に伸ばすことができている。本実践では特に英語ディベートの実践を通じ、どのように生徒が語彙理解において変容したかに焦点を当て、発表する。

(3) 「指導すべき語彙の増加に対応するには？—英語授業に組み込む文脈想起教示（CRI）」

長谷川 佑介

中学校と高校の立場から提案された2つの実践内容について、外国語語彙習得の観点から理論的な解説を試みる。また、小学校から大学まで幅広い環境で手軽に取り入れることができる指導技術として、語句を手掛かりとしたリテリング活動の指導法を提案する。Nguyen and Boers (2018)によれば、リテリング活動には語彙習得を促す効果もあるという。その指導効果を説明するために、文脈想起教示（CRI）に関する研究成果の一部を紹介する予定である。